愛知教育大学附属高等学校研究紀要第 46 号
pp.69～78（March, 2019）

# 自由英作文指導実践報告

## ―問題意識の育成と発信力の向上を目指して―

外国語(英語)科　川上佳則

本研究では、第三学年の応用英語（学校設定科目）において、２０１８年の６月から約６ヶ月間、身の回りのトピックについて、個人とグループでそれぞれ自由に選んで英語で書き、発表する自由英作文活動を行った。新聞記事やニュースをはじめとした身の回りの最近の出来事を生徒自ら取り上げ発信することで、ツールとしての英語を、必然性を感じながら使用し、その運用能力を向上させることが主たる狙いである。また、本活動を通して日頃から世の中に対する関心を高め、日常的に世の中の何が問題なのか考え、より主体的に問題意識を実感する機会になることを期待する。

なお、生徒英作文や意識アンケートからは、生徒の英作文表現活動に対する自信の高まりに加え、一部表現力の多様化や語彙・語数の増加を期待させる結果が得られた。また、半年間のデータを分析することで、生徒が日常的に持つ関心事の広がりと傾向を知り、今後の指導の参考とすることができた。

<キーワード> 自由英作文　自ら選ぶトピック Topic-Selection Control　問題発見能力

### 1.　研究の背景および目的

これからの社会に求められる人材の育成に向けて、学習指導要領が重視してきた一つに問題解決能力の養成がある。授業者自身がこれまで在籍した学校でも総合的な学習の時間を中心に創意工夫された取組が様々にあったように思う。一方、日々の授業実践の中で、教科教育の中にはまだ工夫や改善の余地が多くあるのではないかと感じることがある。英語の授業の場合、教員がテキスト内容からあらかじめ抽出した問題・課題を生徒に提示した上で、生徒に考え、意見させるようなパターンが多い。教師が（問題だと考えて）準備したいくつかの問題群から選んだ一問題の解決に取り組むのと、一定の領域やテーマから、自分たち自身が発見した気になることや、知りたいことを問題として設定してから取り組むのとでは、その姿勢や事後に得られる達成感に大きな差が生まれるのではないだろうか。実際、自身が本研究に平行して愛知教育大学の先生と共同で行った「総合的な学習の時間における教科横断型学習の実践」を通して、その違いを強く感じたところでもある。

問題解決能力の育成のためには、自分たちの身の回りのことを日頃からよく観察し、そこに内包されて（あるいは隠れて）いる事象が問題であると生徒自身が気づき、問題意識を持てた時がスタートラインで、実にそのスタートライン探しこそ主体的な学びに向けた取組の要だと考えている。その取組を日常的に教科教育の中で実践することで、問題発見・解決能力の養成に貢献できないかと考えたのが本研究活動の根幹にあるアイデアである。

今回、英語の授業の中では、自由英作文活動が本研究活動に最も適していると考えた。週２単位の配当がある応用英語（学校設定科目）において、自分が関心を持った身の回りのことについて、個

人とグループで２回、それぞれ英語でまとめ、発表し、内容を共有する活動を導入する。約半年間かけて彼らの作文の質と量、そして心理的な側面にどのような変化・影響があったのか検証する。今回、授業者が最も注力する点として、自由英作文を書き上げる発信型の英語力の伸長に合わせて、これからの学びに向けた基本的な姿勢に不可欠になると思われる日常的な問題発見能力の育成を置く。

## 2. 研究の方法

(1) 対象生徒

本実践の対象生徒は、高校３年生で応用英語（学校設定科目：２単位）を受講する１学級（文系クラス）４１名（男子８名・女子３３名）である。いわゆる私大文系クラスで、３年次に「数学」の履修がない一方、応用英語をはじめ、複数の学校設定科目を履修するところが特徴的である。当該クラス生徒の英語の学力は、本学年の中でみるとおよそ中程度と言ってよい。なお、英語学習に対する意欲・関心は比較的高いと感じる。

(2) 研究の手順

本研究では、研究対象のクラス（文系クラス）の応用英語の授業において、毎授業の導入部に、グループで身の回りのことについて自由英作文を書き、発表する活動（詳細は後述）を実施する。なお、「身の回りのこと」とは個人的な話題から、国際的なニュースまで興味関心があれば何でも可とし、その元となる媒体も、テレビのニュースをはじめ、インターネット、携帯、新聞・雑誌など、自分が見聞きしたもの全般を認めている。場合によっては批判的内容や、感情的な部分も表現されうるが、尊重されるべき表現として許容した。当然のことながら、他者を誹謗中傷、あるいは人権を侵害するような内容が許されないことは当初から周知徹底している。

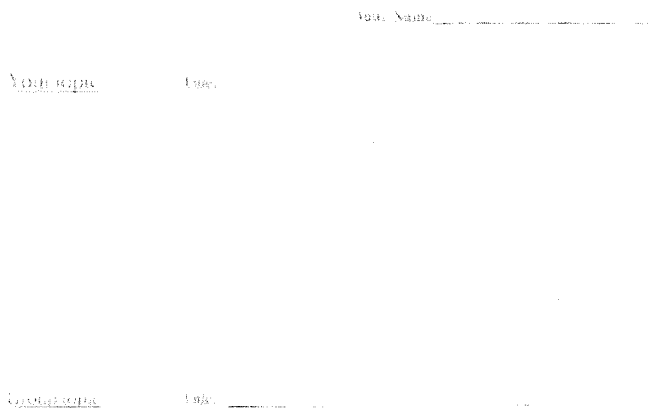
今回、生徒英作文は毎回全て回収し、PDF 形式でアーカイブする。後に、サンプルを抽出し使用された英語の「流暢さ」について分析する。また、「取り上げたトピック内容」については、分析対象を全ての生徒が個人で書いた全ての英作文とし、大量のデータから、現在の興味関心や問題意識の方向性や推移を探る。なお、生徒意識の変化についても、６月と１２月に実施する生徒アンケートから分析する。

(3) 指導上の工夫

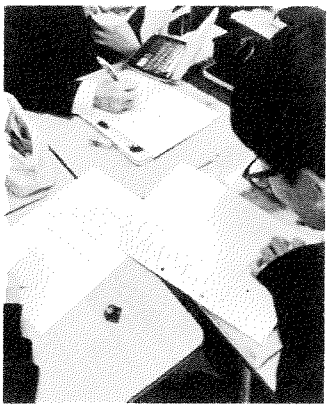
1) 実際の活動内容

本実践における生徒の活動はグループ活動（４人／グループ）を主として行う。活動内容は大きく３段階に分ける。まず、配布したワークシート（図１）に、個人で「気になる身の回りの出来事（以下、トピック）」を４文程度の英語を目標に、５分間で書く。次に、グループ内で全員が発表し、内容を共有してから、「全員が取り上げたトピック以外のトピック」をグループで話し合って１つ考え出し、全員で協力して４文以上の英語でもう一度書く。配当時間は１０分程度である。最後に各グループで作ったトピックをクラスに向けて順に発表する。なお、今回、全ての英作文にタイトルを付けるよう指導した。これは自分たちが記述する内容の一番わかりやすいサマリーとしてタイトルを考えることを期待するものである。活動の後半（１０月以降）には、最後のグループトピックのタイトルをそれぞれ板書させ、黒板を新聞の見出しのようにし、クラス発表を行うことにした。その際に、どうしたら聞き手にトピック内容を効果的に（新聞や雑誌の見出しのように）伝え、興味関心を持って聞いてもらえるか、アイデアを持ち寄り試行錯誤して作るよう助言した。生徒の活動の様子は、画像 1、2 を参照されたい。

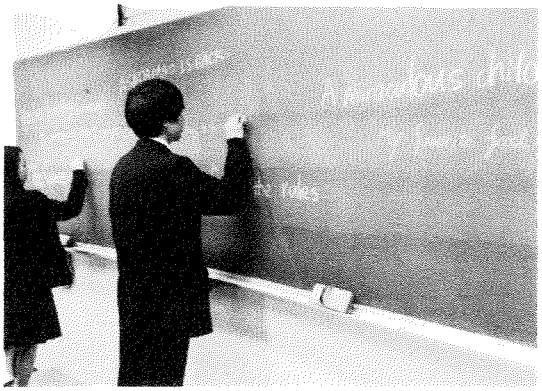
図１（提出されたワークシートの抜粋）



画像１（グループ活動の様子）



画像２（タイトル板書の様子）



2）「生徒自らが選ぶタイトルの自由英作文」に関する先行研究

Bonzo(2008)をはじめとした ESL 学習者の自由英作文に関する多くの先行研究によると、教師が与えるより生徒が自らトピックを選ぶ方が、その英作文の量・質（流暢さ）・取組の姿勢ともに良好な結果が期待できると概ね考えられている。その子細（例えば「流暢さとは何か」など）については引き続き議論の余地があるにせよ、一定の効果は確かにあると示した先行研究の結果を始点としたい。従って、今回は「教師が与えるトピック」と「生徒自らが選んだトピック」を比較して検証するのではなく、先行研究に従って有効と考えられる指導法を通して、生徒が自ら選んだトピックを英語で書き続けることでどのような変化・影響があるかを考察することを主旨とする。また、国内における先行研究対象の多くは大学生（e.g., Andrew SOWTER, Michael PARRISH, 2013; Daniel Ferreira, 2013; Paul Dickinson, 2014; Takinami,2018）で、高校生に関する研究は数が少ないこともあり、Head(2016)を参考にしつつ、高校年代の ESL 学習者にはどのような影響があるのかを考察する。

3）取り巻く社会を見つめる客観的視座の獲得に向けて

今回、彼らが継続的に書く自由英作文の内容は「気になる身の回りの出来事(Current topics around you)」としたが、その主たるねらいは、取り組みやすい内容として提案するのではなく、世の中の課題や問題について、彼らの身の丈にあった視線で捉え、考えさせることである。実際、社会にひしめく時事問題が問題として彼らの心に迫りきれないのは、その実感が不足しているからだと考えている。その事象と本人との間にある心理的な距離感が、主観的に取り組むことを阻害するフィルターとなっているのではないだろうか。生徒が実感の伴う問題意識を持ち、客観的に表現・発表することで、何

事も主観的・独善的になりがちな彼らの視座を多面的に拡張するチャンスになることを期待する。また、その活動のために英語を手段として必然的に運用することになれば、本質的な学びの課題に迫りながら、それに付随して英語の力が身につくという理想的な外国語学習の可能性も見えてくる。なお、その関心の変容については、生徒英作文タイトルの内容分類と生徒アンケート（詳細については後述）の結果から考察する。

4）最小限のフィードバック

毎回の授業で、彼らが身の回りのトピックを２度書き、発表活動にも用いたワークシートは、グループ毎でまとめて提出することになっている。提出された英作文は、Semke(1984)をはじめとした先行研究が、教師の直接的な英文添削が必ずしも生徒の英作文活動を促進しないとする主張を参考に、彼らの文法や語彙に誤りがあっても、原則添削をせず、簡単な内容についてのコメントを付し、後日返却する。その誤りによって文意や意図がほとんど伝わらないようなレベルのものについてのみ、赤で下線を引く程度である。これは、あくまで生徒自身による気づきを促す程度に留めておき、その変容の度合いを測る狙いと合わせて、本実践を今まさにあらゆる社会で求められている持続可能な活動とすべく、教師にとって持続的に実施できる形式として提案するものである。

（4）指導実践期間

本自由英作文指導を実践した期間は、平成３０年度６月初旬から、平成３０年１２月までである。

（5）研究データの収集方法と結果

1）研究の３つの観点

今回、生徒の自由英作文を対象に検証・考察したい観点を３つとする。まずは、「英語の流暢さ」である。「英語の流暢さ」自体についての議論(e.g., Abdel, 2012; Andrew SOWTER, Michael PARRISH, 2013)はあるが、今回の検証においては「語彙の幅(The number of Unique Words)」、「語数(Total number of Words)」、「文法・語法的正確さ(Total number of Errors)」の３点から英語の「流暢さ」を測ることにした。次に、生徒英作文のタイトルと内容を元に、「生徒が取り上げるトピック内容」について分類を行い、生徒が持つ関心の広がりについて考察する。そして最後に、事前と事後の生徒アンケートを通し、「本活動に向けた生徒意識」の推移について検証する。

2）「流暢さ」を測る研究対象の分類

指導の当初より、生徒が提出したワークシートを全て PDF にしてアーカイブした。まず、該当クラスを英語の考査の成績毎に最上位「A 層」から最下位「D 層」に至る４層に分け、各層から抽出した生徒の英作文で使う英語の「流暢さ」ついて検証・考察した。また、検証する対象とした生徒の英作文は全１２回分で、２０１８年の６月から１２月に書いたものから各月２回分ずつを抽出した。

今回「流暢さ（語彙の幅・語数・文法的正確さ）」の検証の対象とした数字は、上記した３つの数字のうち The number of Unique Words と Total number of Words については、Head(2016)を参考に Web 上で UsingEnglish.com.(2015)の Text Content Analysis Tool というソフトウェアを利用して算出した。なお、Total number of Errors については、今回その種類を「A. スペル」、「B. 時制」、「C. 主従・能動／受動」、「D. 語順」、「E. 単複・語形」、「F. 語逸脱・語余分」と「G. 日本語」の７種とした。難しい分類であったが、特に「冠詞」の厳密な使用については細かく問わない前提で、生徒

作文の分析と平行して一例ずつ検討しながら、最終的に７種に分類した。なお、A から D の４段階にレベル分けした生徒の英作文分析（１２回分）の内訳は以下の表１、２の通りである。

表１

| A | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ | Av. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| The number of unique words | 25 | 26 | 27 | 31 | 22 | 25 | 31 | 29 | 26 | 37 | 27 | 31 | 28.1 |
| Total number of words | 29 | 34 | 32 | 36 | 28 | 30 | 41 | 35 | 36 | 42 | 32 | 42 | 34.8 |
| Total number of Errors | 3 | 3 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 3 | 2 | 2 | 4 | 1 | 1.7 |

| B | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ | Av. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| The number of unique words | 27 | 24 | 18 | 19 | 33 | 22 | 12 | 19 | 31 | 20 | 32 | 25 | 23.5 |
| Total number of words | 29 | 31 | 21 | 21 | 46 | 29 | 13 | 21 | 43 | 26 | 41 | 30 | 29.3 |
| Total number of Errors | 5 | 4 | 2 | 2 | 3 | 4 | 6 | 2 | 3 | 0 | 3 | 2 | 3.0 |

| C | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ | Av. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| The number of unique words | 21 | 20 | 20 | 20 | 24 | 24 | 21 | 24 | 18 | 20 | 20 | 21 | 21.1 |
| Total number of words | 29 | 27 | 24 | 25 | 32 | 30 | 25 | 29 | 21 | 27 | 26 | 38 | 27.8 |
| Total number of Errors | 3 | 2 | 1 | 1 | 4 | 5 | 3 | 0 | 1 | 6 | 1 | 1 | 2.3 |

| D | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ | Av. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| The number of unique words | 23 | 26 | 18 | 19 | 6 | 21 | 25 | 0 | 21 | 23 | 24 | 30 | 21.5 |
| Total number of words | 28 | 36 | 20 | 23 | 7 | 23 | 33 | 0 | 23 | 30 | 29 | 35 | 26.1 |
| Total number of Errors | 3 | 3 | 1 | 1 | 0 | 3 | 4 | 0 | 1 | 5 | 2 | 3 | 2.4 |

表２

表１を見ると、語彙の幅については上位者が平均的にやや多いが、A 層を除き大差は無く、概ね成績に応じた数字といえる。また、語数についても、A 層から順当に成績順に語数が並んでいる。D 層の生徒も多少のムラは見られるが、トップである A 層との差が平均して８語、およそ１文程度の差に収まっている。なお、英語の誤りの数は成績順になっていない。生徒の誤りを分類する中で、英作文の

中に「日本語」を書いた数について、D 層生徒が「１箇所」使ったのみ（A 層と C 層はゼロ）だったのに対して、B 層生徒には「６箇所」あり、成績はともかく、生徒個人の英作文活動に対する取組姿勢の影響も感じる結果となった。

また、表２から語彙の幅と語数の推移を見ると、個人差はあっても、全ての層がほぼ横ばい、あるいは、やや増加する傾向がある。どの層にも多少増減があるが、語数については少しずつ、着実に増加している傾向が見られる。

なお、生徒の誤りで最も多いのが「スペル」で約３７％、次に「語逸脱・語余分」が２５％、最後に「単数・複数・語形」の１７％となった。予想に反して「時制（７％）」や「主従（３％）」のミスは少なく、あったとしても、段階的に協働学習の中で改善されていく様子が見られたことも追記しておく。

3)「取り上げるトピック内容」の分類結果

トピック内容の分類については、グループトピックを除く全ての「個人のトピック」を対象として検証し、その総数は７４５例に及んだ。対象からグループトピックを除外したのは、グループトピックは、グループで時間をかけて周到に書かれたものであり、クラス発表に向けて体裁を整えることが前提で作られていることから、生徒個人の関心が大きく反映されたものとは言い難いと考えたからである。分類にあたり、まず News（刑事事件除く）と Cases（刑事事件含む）を分けてから Entertainment と Sports を加えて、それぞれ国内か海外かに分類した。そこに、School Issues と Friends and Family Issues 加えた後、前記のどれにも該当し難い個人的な内容・関心事として News about Me を加え、全１１項目の分類を設定した。分類の結果は以下の表 3 の通りである。

表 3

| Classification on Topics | Total | % |
|---|---|---|
| News | 125 | 16.8% |
| World News | 24 | 3.2% |
| Cases | 15 | 2.0% |
| International Cases | 1 | 0.1% |
| Entertainment | 75 | 10.1% |
| Word Entertainment | 3 | 0.4% |
| Sports | 40 | 5.4% |
| World Sports | 7 | 0.9% |
| School Issues | 110 | 14.8% |
| Friends and Family Issues | 92 | 12.3% |
| News about Me | 253 | 34.0% |
| Total number of Topics | 745 | |

自分を主語とせず、できるだけ世の中の出来事を客観的に記述させるねらいから言えば、News と World News が合わせて全体の２割、そこに Entertainment や Sports を加えるとおよそ全体の４割近くを占めたことは、注目に値する。当初授業者は、自分のことを書くことが精一杯ではないかと考えていたが、活動が始まると、生徒が授業以外の日々の生活の中でニュースを追い、準備しようとする姿を多く見かけた。また、学校生活や友人・家族について記述する内容についても、常にそこには「思い」や「感情」が込められていたことに気づかされた。Semke が言うように、たとえ短いコメントの中であっても、"...teacher responses of acceptance, encouragement, and understanding...(Semke,

1984)”を伝えることで、生徒の英作文の表現内容の広がりは阻害されず、更に促進できる可能性があると感じている。

4) 生徒アンケートの分析

生徒アンケートは６月（３９名回答）と１２月（４１名回答）の２回実施した。６月実施時に回答数が減少したのは欠席者２名によるものである。

なお、アンケート項目の問１と問２は、彼らが日頃持つ問題意識に繋がりうる興味関心とその発信力について、問３と問４は活動を通した英語の実践的な使用感について、そして問５は協働的な学びについて計る意図で設定した。アンケート内容と結果は以下の表４の通りである。

**表４**

問１．**身の回りのニュースや時事問題について関心がありますか？**

| 回答 | ６月 | １２月 | 差分 |
|---|---|---|---|
| ・ある | １５．０％ | ２７．０％ | ＋１１．０％ |
| ・どちらかといえばある | ３８．０％ | ４６．０％ | ＋　８．０％ |
| ・どちらかといえばない | ３８．０％ | ２４．０％ | －１４．０％ |
| ・ない | ８．０％ | ２．０％ | ＋　６．０％ |

問２．**いくつか身の回りのニュースや時事問題を、日本語で人に伝えられますか？**

| 回答 | ６月 | １２月 | 差分 |
|---|---|---|---|
| ・自信をもってできる | １８．０％ | ２２．０％ | ＋　４．０％ |
| ・何とかできる | ４９．０％ | ６１．０％ | ＋１２．０％ |
| ・なかなかできない | ３１．０％ | １５．０％ | －１６．０％ |
| ・全くできない | ３．０％ | ２．０％ | －　１．０％ |

問３．**今、目で見たり、聞いたりした身の回りのことを、簡単な英語で表現できますか？**

| 回答 | ６月 | １２月 | 差分 |
|---|---|---|---|
| ・できる | ３．０％ | ２７．０％ | ＋２４．０％ |
| ・どちらかといえばできる | １８．０％ | ６３．０％ | ＋４５．０％ |
| ・どちらかといえばできない | ６４．０％ | ２５．０％ | －３９．０％ |
| ・できない | １５．０％ | ３．０％ | －１２．０％ |

問４．**授業の中で「英語を使えた」と感じることはありますか？**

| 回答 | ６月 | １２月 | 差分 |
|---|---|---|---|
| ・ある | ３．０％ | ２７．０％ | ＋２４．０％ |
| ・どちらかといえばある | ３６．０％ | ４６．０％ | ＋２０．０％ |
| ・どちらかといえばない | ５１．０％ | ２２．０％ | －２９．０％ |
| ・ない | １０．０％ | ５．０％ | －　５．０％ |

問５．**グループ活動中心の授業についてどう思いますか？**

| 回答 | ６月 | １２月 | 差分 |
|---|---|---|---|
| ・よい | ３６．０％ | ６１．０％ | ＋２５．０％ |
| ・どちらかといえばよい | ５１．０％ | ３４．０％ | －１７．０％ |
| ・どちらかといえばよくない | １０．０％ | ０．０％ | －１０．０％ |
| ・よくない | ３．０％ | ５．０％ | ＋　２．０％ |

意識アンケートの結果は、あくまで生徒側の印象に関する変化であり、その結果を過度に信頼、または評価することはできない。しかし、少なくとも今回の結果から、約半年間の活動を経て、生徒の

本活動に対する意識は概して向上しつつあると言えるだろう。特に問３と４の推移は、授業を通して彼らの積極的な参加姿勢からも十分に見て取れる部分はあるとはいえ、授業者の予想を大きく超えた結果となった。問１と２からは、世の中の出来事についてはおよそ７割以上の生徒が関心を持つようになり、同時にその内容についてなんとかアウトプットできるとする生徒は８割を超える。問４には、７割を超える生徒が本活動の中で英語の使用感を実感できていると答えている。また、常にグループ単位の活動を授業の中心に据えて、助け合い、学び合うことを促しながら活動してきた結果が問５の回答となった。

## 3. 研究の結果

生徒自らが選んだトピックを自由英作文形式で６ヶ月間書かせたが、英語の「流暢さ」について、大きい伸長は見られなかった。ただ、詳細をみると、語彙の幅に顕著な変化は見られないが、語数については、やや増加する傾向がすべての成績層に見られた。生徒の文法や語法の誤りの傾向からは、数が少ないとはいえ同一人物に継続的に繰り返されるものもあり、教師の指導が与えられない中で生徒自身による改善の難しさを示している。また、英作文の誤りについては、その成績に関わらず、個人的な向き不向きや取組の違いによって差が見られた。そして当然予想されたことではあるが、概ね、英語の流暢さは英語の成績に応じて発揮される傾向があると言って良いだろう。

今回７００を超える生徒英作文の分類から見えてきたのは、彼らが主体的に「取り上げるトピック」の傾向である。その約６割が、「自分を中心とした、友人・家族・学校に関する内容」で、その他４割が「ニュースなど自分と直接の関わりのない内容」であった。また、ニュースに関しても、芸能やスポーツが主たる内容として選択されるとする授業者の予想に反し、実際は、まさに時事的なニュースがその約半数を占めた。一方、刑事事件となるようなニュースについては２％程度に留まり、彼らがアウトプットしたいと考えるニュースの方向性や種類についても、一考を要する結果となっている。なお、全体的な傾向として、実践の後半部に近づくに従い、News about Me の数が増加したことを付記しておく。

最後に、生徒アンケートの結果については、その推移を過剰に評価することなく、今後の指導改善の参考までに留めておきたい。しかしながら、個人的な営みになりがちな自由英作文指導を協働的な学習の中で実践することの価値を見いだせる結果であったことは間違いないだろう。

## 4. 考察

(1) データの抽出方法と客観的指標の確認

生徒英作文からは大きな変化が見られなかったが、これは抽出する生徒の母数が少ないことが理由の一つと考える。その傾向の信頼性を高めるためにも、可能な限り検証の対象数を増やす必要がある。

また、２の「研究の方法」でも述べたが、英語の「流暢さ」については、多くの議論がある。語彙一つ考えても、今回のように TTR(Type token ratio)の元になる数字(number of tokens, number of types)を並べただけでは十分な分析とは言えず、今後更に研究の信頼性を高められる客観的な指標（e.g., “Lexical diversity, Lexical density and Lexical sophistication” (投野, 2014)）を求めるべきだろう。また、Bonzo が指摘したように、自らが選んだトピックだとしても、その文法上の困難を改善できる訳ではないのは高校年代も同様であった。今後の課題として、生徒英作文の中に誤りの繰り返しや表現の偏りがあっても、生徒自ら修正しきれない（またはするつもりがない）点が挙げられるだろう。

(2) トピックタイトルの分類方法

今回の作文内容の分類の仕方が果たして適切だったかどうかは継続的に精査していかなければならない。例えば、「天気（個人的な感覚や不確かな情報）」や「地元の小さいニュース」などは、News about Me としたが、その数は多く、今後は別項目として考える余地がある。ただ、その他については、概ね生徒の関心の幅をよく示す結果だったと言える。今後も課題発見能力の育成を主たるねらいとするならば、更に外向きの視点を持たせるための方策が求められるだろう。ただ、教師側からの働きかけが過ぎると、主体的な気づきを求める本来のねらいに反するおそれもある。生徒の主体的な表現欲求を尊重し、生徒が協働的に学ぶ機会を提供する中で、彼らが自発的に視野を広げることを期待する。

(3) 自由記述式アンケート回答

約半年間で大きな改善の推移を示した生徒アンケートであったが、自由記述式の回答には気になるものがいくつか見られた。特に、グループで協働してトピックを作成する活動について、作業量の大きな偏りがあると訴えるものがあった。実際、全体の様子からは見落としがちな点であり、今後も協働的な実践を行う際には、分担を指示するなど負担の偏りを解消する配慮と工夫を行う必要がある。一方、「以前より国際関係のニュースを見るようになった」、「たくさんの時事問題を知ることができて楽しい」など、日頃の認識の広がりを実感するコメントや、「簡単な英語でならニュースを伝えられるようになった」、「（英語を）使うことで頭に定着した」など、道具としての英語運用力の伸長を実感するコメントも見られた。

## 5. まとめと今後の展望

自由英作文活動を通した問題発見能力の伸長にフォーカスした本実践であったが、分析方法やその指標の選択、あるいは英作文分類の方法について課題が残った。特に、語彙の幅と語数の分析は、抽出生徒数を増やすことで、もう少し明らかな傾向が得られる可能性がある。エラー分析においても、参考とすべき例が多様で、結局、限られた例文を添削しながら分類せざるをえなかった。また、今回は英語の「語彙の幅」を英語の「流暢さ」の要素として検証したが、例えば Daller et al. (2007) が「語彙の３要素」として breadth(広さ)と depth(深さ) に加えて fluency(流暢さ)を提示したように、流暢さと語彙の密接な結びつきゆえに、研究者によってその捉え方は多様である。今回のように先行研究を再現するのではなく、前提とし、その先の変化を求めて実践するなら、当初にそのねらいと目標を明確に生徒に示すこともできるだろう。なお、生徒が自分でテーマを決めて取り組む自由英作文活動は "easy to implement and takes up relatively little class time (Paul Dickinson, 2014)"で、汎用性が高く、生徒レベルによって制約や設定を大きく変える必要が無い利点がある。高校初年度から３ヶ年を見越した持続的な自由英作文活動の導入など、新課程に沿った指導方針の軸として提案できるものと考えている。

授業者が自由英作文のテーマとした「身の回りにあるトピック」は、単に「自由に選べるトピック」とは考えていない。本実践を通して期待したのは、英作文をよりよく書くためだけでなく、高校生であっても主体的に社会の在りように目を向け、習慣的に客観的視座を鍛えながら、社会に内包されている問題（あるいはその種）を見出す力を身につけることである。それを教科教育の中で日常的に経験させることで、これからの社会に求められる「未知の問題に取り組み、その解決に寄与できる人材」育成の素地作りに繋げたい。今後も、単独の教科教育に留まらない全ての教科教育に通底する本質的な学びを、毎日の授業の中で生徒が感じられるよう、引き続き研鑽を積み創意工夫に努めたい。

参考文献

Abdel Latif, M.M. (2012). What do we mean by writing fluency and how can it be validly measured? *Applied Linguistics*, 34.1, 99-105.

Andrew SOWTER, Michael PARRISH. (2013). Does Choice of Topic Affect Writing Fluency? A Quantitative Study of Japanese University EFL Students. *Kwansei Gakuin University Repository, 言語教育センター研究年報 , 2013 , 16* , pp.53-76.

Bonzo, J.D. (2008). To assign a topic or not: Observing fluency and complexity in intermediate foreign language writing. Foreign Language Annals, 41, pp.722-735.

Daniel Ferreira. (2013). Researching the Effect of Students' Self-Selected Topics on Writing Fluency. *フェリス女学院大学, フェリス女学院大学文学部紀要 , 2013* , pp.297-306.

Daller, H., Milton, J. & Daller, T.J. (2007). Modelling and assessing vocabulary knowledge. Cambridge: Cambridge University Press.

Head, Philip. (2016) Topic Selection, Feedback, and Improving EFL Writing Fluency in Japanese High School Students. OSAKA JALT JOURNAL VOL3, pp.19-34.

Paul Dickinson. (2014). The Effect of Topic-Selection Control on EFL Writing Fluency. Niigata University of International and Information studies. *新潟国際情報大学 , 情報文化学部紀要*, pp.15-25

Semke, Harriet. (1984). Effects of the red pen. *Foreign Language Annuals, 17, No.3*. pp.195-202

Takinami, Wakako. (2018). Influences of Topic Selection Methods on L2 Learners' Writing Fluency: Replication Study. *鳥取大学教育支援・国際交流推進機構教育センター, 鳥取大学教育支援・国際交流推進機構教育センター紀要. 2018, 14*, 63-78

投野　由起夫(2014). Measures of Lexical Richness. Retrieved from http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/corpuskun/pdf/2014/LexMeasureHandOut.

UsingEnglish.com.(2015). Text Content Analysis Tool [Software]. Retrieved from http://www.usingenglish.com/resources/text-statistics.php